

1952 Julio

N-ro 1

ETA LITERTUR GAZETO

# LEONTODO

ELDONITA DE OTARU ESP-ASOCIO

# ENHAVO

1. ANTAUPAROLO ..... 3p 山本 昭一郎
2. エスペラント人種について ..... 4p 佳山 やす子
3. 講習会の思い出 ..... 6p 高橋 達治
4. KOREGON ! ..... 9p 山本 昭一郎
5. AKACIOの樹蔭から ..... 11p 中沢 天眼
6. 私はエスペラントを信仰して居ます ..... 12p 土田 虎幸
7. Novaj gesamideanoj  
にのぞむもの ..... 13p 前田 幸一
8. エス語の慣用語句 ..... 15p 早川 昇
9. D-ro Privat への  
Salutoleto ..... 23p 山賀 勇
10. 編輯後記 ..... 24p

# ANTAŪPAROLO

Y.

TITOLO については大分苦心したことを書くのも無意義ではない様に思います。titolo のことではいろいろと考えました。Samideanoに会うごとに eldoni gazeton の話をし、またそのtitolo はいかにすべきか考えてもらいました。respondo をくれた人もあり、くれない人もありました。一寸集まっただけでも GLACFLORO (氷の花), BELA ĜERMO (美しき萌芽), NORDA HOMO (北方人), (北限界) espe=?, KONVALETO (鈴蘭) K.T.P. 個々の意味に面白く首肯出来るものが多いのですが、この gazeto が literatura なものであり、とくに Esp での記述が当然ですから、普通の日本の文藝同人誌とは自ら目的も違い titolo も独特のものであつてほしいと思いました。意味も大切だが Esp で口ざわりのよいことも大切でした。LEONTODO も思いつきみだいな偶然さで飛び出してきたものですが、これだと口ざわりもいいし、気持にぴったりとくる所がある様に思われました。今のところこれが決定について反対者はない様ですが、もっと適当したものがあれば変えてもいい位のつもりで居ります。しかし名前まけということもありますから、あまり立派すぎるのは敬遠します。要はその内容を端的に表現していればいいのです。

Leontodo (Dandelion) は春から夏にかけて、土堤に森に路傍に又野原に、あたりを明るくするばかりに陽気にその小さな黄色い花を咲かせます。平凡であるけれど、誰にでも親しまれる愛らしい花。(私はどうしても草とは云えないのです) 幼児が一番最初に印象する花はタンポポではないでしょうか? 幼ない頃、黄色いタンポポの花を一つ一つと集めては、それで花輪を編んで玉冠のように頭にのせたり、首にかけた記憶はどなたにもおありでしょ? 春になってタンポポが咲かなかったらどんなにかさびしいでしょう。暖かくなってきた五月頃、人々は無意識のうちに眼でたんぽぽをさがすのではないのでしょうか。

Leontodo は宿根草です。この根強い草は、踏まれても踏まれても又立上り、風雲に耐えて、年々歳々必ず花をもたらししてくれるうれしい頼りになる herbo。どんな瘦地にもどんな路傍にも咲くのです。タンポポのきれいな人ってないだろうと思います。牛や馬などの草食獣達にさえも愛されているのです。春、郊外に出て、道端の草叢に無数に群生しているタンポポの、菜の花畑さながらに咲き乱れているのを見るとき、私は思わずそこに坐り込んでしまいます。私はタンポポこそ平和な花だと思えます。私達がタンポポから会得すべきものがまだあります。その花もやがてしぼんで、こんどは落下傘の様な無数の種子を風にのせて、遠く近くにまき散らします。何百米も遠方に運ばれてゆき、そこに土着する。そんなにも強い伝播力、順應性、根強さ、そして美しさ。

## エスペラント人種について 佳山やす子

私はエスペラント人種というものについて考える。私は時々いろんな人に私達の言葉をプロパガンデイする。或人にすゝめたら「手紙を書く事の好きな人がやることですね」と言った。更に私が語をついで、外国から始めて遙々と自分の許に手紙が届いた時如何に嬉しいかを説明したら「そんな喜びなんてさつぱりピンと来ない」と言った。こういう人は殺い難い人、生れつき私達の範疇にはいない人である。非エスペラント人種である。私自身はエスペラント人種である。

嘗て私が今迄の生活を精算して家に落着くことにした時、何かをしてみたいと思った。それは漠然としてつかみどころがないが、何かの欲求が心の内奥に存在していたのである。これからの単調で空虚であろう生活を想って、無為に終らせることなく何かを身につけたいと考えていた。身につけるといふよりも、必然的にせばめられる環境の故に慰安を求めていたのかも知れない。将来おばあさんになって過去を追憶する時、現

在の数年間が全くのブランクで何も思い出せない、たんぽぽの綿毛のように吹けば飛ぶようなものであっては困ると思つたのである。個人の生活に於て、何時の時代をとりあげても思い出がゆたかで充満して、追憶が微笑を伴うものであつたらどんなによいだろう。何でもよかつたのだけど、私は語学が好きだつたから英語をはじめた。毎日曜、商大の某先生の許に通つた。然し、そんなのはさつぱり緩慢で非能率的で意味のないことに思われて来た時、私の前にエスペラントがクローズアップされた。私は生れながらのエスペラント人種であつたから、勿論すぐに飛込んで、それに浸つて感動した。併し同時に生れながらの *mal-inteligencie* のために、間もなく熱もさめ、今日の状態になって少しも伸びないけれど、私は私達の言葉を今尚愛していることはたしかである。

外国の近代の著名な小説を読んでゆくと時々、エスペラントという語が出てくる。そうすると、異国で親しい友にでも出逢つたように、はたと胸をつかれ、頬が熱くなり、胸がどきどきしてくるのである。これはエスペラントを愛している證據ではないだろうか。過去四年の間に、外にあつたエスペラントが習慣となり、今では私自身に交り合つてしまつたのだと思う。ともあれ、近代の小説の中にエスペラントが一寸でも出てくるのは嬉しいことである。しかも、私が生涯手許に置いておきたいと望んでいる二三の感動した小説の中に存在していることは嬉しいことである。たとえ作者が好意をあまり持つてくれなくとも、それは伸び行く私達の言葉の存在を私に示してくれるのだから。

外国人との文通は楽しい。時間がかかるので楽しみを引きのばしてくれるし、遙々遠い地から私宛てに長い旅をしてくれたのだと思うと、その手紙そのものに“御苦勞様”といたくなる。遠い外国に住む一人の未知の人との間にかもされる友情は、所詮夢のようにはかないものである。私達はその文通の相手の *adreso* を手に入れて文通をはじめめる。その人の生活や思想を知つて友情が高まつて来ても、一度も出逢つた事もなく、今後も永久に出逢はないのだから、その友情も熱烈になればなる程可憐なものだと思ふ。現実には何処かに存在していることはたしか

でも、一目も見ないということは架空の人物に等しい。架空の人物が作る協力の物語、だから私も現実の自分をかくして架空の人物になって手紙の中でよい気分で活躍する。こういうことをだのもんであるのだから私はたしかにエスペラント人種である。

エスペラントはまた、日々の生活の流れに中と厚みと、そして重みをほしいという私の願いの幾分かを実現してくれてゐるように私は思うのである。

(15. Junio)

## 講習會の思い出

高橋達治

市役所から図書館へ抜ける道の新緑は何と私に懐しいものになったことだろう。三年このかたというもの、五月がくれば私は図書館へ通うために幾度も幾度もその下を通る。緑の蔭をそつとその頬に浮かべながら、いそいそとこの道を横切つてゆく人を私は愛する。此の人達はただ生活のために忙しい町の人とは違う。少なくとも——いわば“町”から解放された人達なのだ。何ともいえぬ *trankvileco* といったものを、清い瀧を見たときの感じのようなものを、私はこの風景から感ずる。と云ふ、私はここに来たとき、この時の *senfo* に最も近い *melodeo* をかねばならぬ。“*La espero*”——私は閉耳をたて、そしてそれに近く。図書館は裏口から入る。そのことは *neceso* からでもあるがそれ以上に、私に、ふとしたこの図書館への親近感をもたせるからだ。

*ĝeamikoj* が私を待っている。本当に私を待っているのだ。階段を上るとき、私は或種のおののきを感じず。 (講習會が初まつたばかりの頃特に強く此を感じる) それは薄っぺらな責任感などによるものと違う。面もなく非才をおして講師をつとめるという私の *malhonesteco* ばかりによるものでもないようだ。——それ以上の何かだろうか——。

今年の講習會で20人の *gesamideanoj* と *amikiĝi* することが来た。去年も20人位だった。S-ano と S-anoj の区別も去年

と同じ位である。唯違っていることは、今年の新しい同志が殆んど休まず最後まで講習会に出てくれたことである。講習について私もいろいろのことを聞いた。—— kurso も interparolado も積極的に、出来るとか、出来ないとか、そんなことを疑懼せず、とにかくやれ——などと言われると私は心強い。実際に私がそういう態度であつて、それを支持する S-ano の言葉であれば、勿論私としても反駁することもない。おまけに私には——私達の movado についてはすべてであるが——山賀さんという支柱がある。私はどんな Esp-movado にも山賀さんを頼りにする。むしろ山賀さんに徹底的に従属して行く。殆んど山賀さんの指示のみに従う。それではなければ安心感もできず、やり方の妥当性も得られず、実際に不可能であるからだ。それ故、山賀さんに「君でもよし、やれ」といわれれば、去年の失敗もこりず、一言もいわずに引受けるだけの勇気が湧いてくるわけである。F-ino T は講師の筈なのに出てこられなかった。S-ro H が講師を固辞されたが、御多忙中という理由をぬきにして、私は敢えて「kurso は自力の能力などを疑懼せず、積極的にやれ」という前言を彼等にも反復するだろう。講習の方法について中央では、大抵の場合、interparolado を中心に講義を進めているという話を私は二年前に実際にそれらの人々から聞いた。外国語の講習は当然そうあるべきである。「話す」「聞く」ということは無論「ことば」の根本的な意味で、これを中心にして講義をしなければならぬことは勿論である。ところで実際問題として、講習者の耳と口からだけでエスペラントを理解して貰うことは難しいことである。オー私自身が interparolado に十分の才がないのだ。それから受講者の方でも、外語の経験が相当あつて interparolado から自然にエスペラントを理解され、その構成をも知るというような人も少ないように見受けられたし、一般にこれを好まぬ傾向がある。だが何よりも、そうして講習を進めるためには時間が不十分である。一週三時間で八週計 24 時間という僅少な時間で、始めて日本語以外の言葉を勉強する人がその方法で実際に「話し、聞き、書ける」ようになれるということは、はじめからとても私には出来まい

と思われた。とにかく、言葉の構成の理解を——そんなすべての意味で講義の目的の中心を小坂氏の「エスペラント講習用書」の理解という点にもって行ったわけである。しかし、それさえも不十分にしか理解されなかったり、又大切な言葉の習いはじめを余りにも迂曲に学習されたり、間違っているとられたりされたとしたら、その罪は当然私にあるので私がお詫びしなければならないのだ。

私達は今春丸井で、世界児童画展及びエスペラント展を開いた。そのことを世間の人々がどうみだかは別問題としよう。ただ私達にはできるだけ多くの方が私達の歩みを理解され、そして出来ればこの歩みに同調して私達の同志になられ、更に私達の集いをより若々しいものにしてほしかつたからである。展覧会場で已に講習会のビラを張って propagandi した。講習会の初日。私達はおぼつかない一待でその反応を待った。受講者がぼつぼつと集まってくる！“やっぱり来てくれた——”そんな歓声が心の中から発してくる。それから講習がはじまった。或時はさわやかな初夏の空気を会場に一杯にして気持よく講義できた。或時は勤めの後の疲れが会場に向う私の歩みをのろくしたこともあった。受講される人にもそんな気持を持たれたことでしょう。しかし、ともかくも講習は終りに近付き、与えられた私の devo は拙いながらも遂行されようとしている。この時に私が私の反省において唯のぞむことは、novaj gesamideanoj 諸氏が、この kurso をきっかけとして、本当にこれからエスペラントを勉強され、利用され、決して決して私輩の如き Eterna komencanto に墮さないように努力されることを、また malnovaj gesamideanoj にあつては、新しい人達の歩みを、あなた達が講習会場に来られて応援下さった御気持と同様、快よく迎えられ、また今後もずっと、よき助力を惜しまないようにして頂きたい。

一つのテーマから次のテーマへ、頁は次第にめくられる。才五課の練習問題を終る。半数の人は完全に理解されているようだ。講習が一日一日と積って、もうあとには数頁しかのこらない。次の頁をめくる。すると、紙面の黝さに時の動きがみえる。“Jam la tempo iri al domo,



“Ĝis la venonta Sabato” と私達は“私達の言葉”で別れの挨拶をする。一人になると私は爽快な気分を覚えた。「快よく仕事をしたあとのこの疲れ」というか——全く快よい解放感である。ふと私の前を見覚えのある多くの人々のゆくのが見えた。今しがた別れた筈の人々もいる。そうしてそれらの人々はゆっくりした歩調で思い思いに歩いているのにみんな一つの方向に向いている。漠然としてはいるが、巨大なものがその彼方から「人々」を魅しているようにも思われる。次に「人々」の数がふえてくるようだ。突然、何かしら絶大なる莊觀がこれから見えるのだというような気持がしてきた……………

(20. Junio)

## KOREGON !

山本 昭一郎

KORO には二つの意味があります。Vortaro を手にとるまでもなく、それが“心臓”と“心”とを意味していることにすぐ気づかれる著です。これに接尾辞-eg-がつくとどんな意味になるでしょうか？この際私の希望としては少々こがつけですが、“強心臓”と“寛大な心”という意味にとってほしいのです。さもないと、今私の書いているこの文の首尾が一致しないのですから。

私がこの Gazeto を発刊しようとした動機は、私達の Esperanto が現在のまゝで放置されているのは、早晩、私達の温かいサミデアノとしてのつながりも絶たれてしまい、私達のエスペラント協会にも、やがては無気力と沈滞が浸入してくるということへの危惧から、今のうちに私達のつながりをたしかなものにしよう。そのためには Gazeto を作る方がいい、ということからでした。Titolo をみても分るように, Literatura gazeto としてあって, Organo としてはありません。私は、Gazeto を作りたのです。協会のエスペラント活動を報道する Organo ではなく、あくまで Esperanto をたのしみ、夢を託するものとして

の文藝的なGazetoであつてほしいのです。ですから、これはその内容と規模から、全北海道のものにしたいとさえ思っているのです。Literaturaといつても、別に尻込みすることはありません。こゝでは、テクニックや洗練よりも、雑気やユーモアが珍重されるのです。

中国人は英語の会話など、非常に早く上達するといわれています。その秘訣としては、自分の発音がたとえ不完全でも、間違つていても、彼等は平気で英国人などと会話をつづける。そのため、寧ろ早く会得する。私達日本人の一般的風習として、人に笑われる様なことはすまい、という款なところがあり、とかく引込思案になり勝ちなのです。間違いをする位ならばはじめからやらぬがまし、という考えがある限り私達はいつまでも上達しないでしょう。私達は、中国人的な“強心臓”をもって、私達の脚でだけでも強引に実用化すべきだと思ひます。間違つていてもいい。上手でなくともいい。Espはあくまでも手段なのだから、Esp-istoとしてその精神(Esperantismo)に於て間然とするところがなかつたならば、やはり立派なEsperantistoだと思ふ。もちろん人少しづつでも上手になってほしい。未熟を自覚する人々も“強心臓”をもってどしどし投稿して下さい。古くからやつている先輩の方達も、無駄に年をとつてはいないということを、思いあがつた若者達に示して下さい。また、些細な文法上の誤りやら、不馴れによる編輯印刷の不手際やらは、“寛大な心”をもって見逃してほしいのです。しかし、あまやかしてほしくはありません。好意ある助言は歓迎します。どしどし指摘して下さい。

(20, Junio)

### 投稿規定

- Japane なら 原稿用紙で、 しめきり 毎月才四火曜日迄
- Esperante なら 綴字をはっきり、 提出先 ○山賀方 O.E.A. 着いば
- いづれも 読み易く書いて下さい。 ○山本

# AKACI O の樹蔭から

花園凡太郎

芥川の読書力は、とても猛烈であつたそうだ。彼は、四五人の乗客を相手に談論風刺しながら新刊の雑誌を読むことができたということだ。彼は英文なら一日に平均五六百頁の本は楽に読んだ"そうだ。生前の或る年、京都に住む谷崎潤一郎を訪問するのに、日本橋の丸善本店で、英文の新刊書を四五冊買って、急行列車に乗り込み、京都駅に着くまでに全部読み終つて、谷崎から更に幾冊かの本を借りて読んだと言う Epizodo が残っているほどだ。

その芥川が、東京帝大の英文科を卒えて、横須賀の海軍機関学校の英語教官となつた時、一番困つたのは生徒の英作文であつたそうだ。どんな下手な英作文でも、彼がテンサクの手を加えると生きてくるので、採点に非常に苦勞したと言うのだ。他の英語教官は、公式時の英語の型にはまっていな生徒の英作文には、遠慮なく劣点をつけるのだが、芥川にはそれが出来なかつた。つまり芥川の頭には、海軍の学校の教官として、英語の智識が余りに豊富であつたのだ。

近頃、高校の生徒の読書力は概して低下していると言う事を耳にするので、芥川のことを書いてみた。いま各学校で取り上げている、Oral methode では、話すことや聞くことは良くできても、読書力は余り増進しないということだ。もち論、語学を学ぶには読み、書き、聞くの三拍子が揃はなくてはならぬのだが、いまの一般的傾向として、兎角読むことが閑却されているように思はれるので、こんなことを書いてみる気になつた。

Esp. の学習についても同様のことが言い得るのではあるまいか。話したり書いたりするためには、先づ、第一に、読書することが最も肝要であると思う。大いに読んで、大いに書いたり、話したりしたいものだ。

( 28, Junio )

## 私はエスペラントを信仰して居ります 土田虎幸

信仰と云う言葉の持つ厳格な意味は到底知る由もありませんが私流に解釋して言うなら、エスペラントは私の信仰です。殆んど狂信的なと言っても良い程の信仰をいただいています。かと言って決してその求道のために日夜血の滲むような精進など決してしては居りません。求道とか、探求とかいった面からすれば私は全くの怠け者です。似非信者です。にも不拘私は敢てエスペラントは私の信仰であるといいたいのです。何故でせう、何故だか私自身にもはっきり分らないのです。ただ、エスペラントで云うホマラニスモ、所謂人類主義ですね。それが此の上もなく美しく立派なもののように思はれるのです。ただそれだけなんです。其の主義に就いて詳しく説明を求められたとしても、皆が納得の行くようには説明出来ないのです。私にはただ美しく高貴に見えるというだけの理由なんですから。だから、狂信的というより盲信的といった方が当てているかも知れません。私のそんなあやふやな態度はこっぴどく非難もされ、輕蔑もされるでせう。しかし私には何にも抗辯のよりどころとするものはありません。ただ顔をあからめてうつむいているだけなのです。しかしやっぱり私は自分自身に言い含めるように心の中で繰返し繰返し言うでしょう。「それでも自分は信仰しているんだ」と。

ただ私が一番さびしいのは、私の信仰の云々に就いてではなく、エスペラントそのものについての非難を聞くときです。或は言語学的にどうの、或はそれをもって平和の樹立などおぼつかないの、そんなものは暇と金のあるブルジョア趣味の人間のやることだの、等。この他色々の悪口を身にするのですが、目下の所ではただ苛々するばかりで、理路整然とやり返す力を持たないのです。これも先程申しましたように本当の理解の上に立たない盲信の結果から、こんな不快な情けない思いをしなければならぬのではないでせうか。

( 21. Junio )

# Novaj gesamideanoj に望むもの

前田 幸一

Novaj Esperantistoj に何をのぞむか? と題はこういうのですがね。私として貴方達に望むべきことは、唯、熱心な Esperantisto になってほしいということです。勿論 kurso を開いて居る以上これが目的であることは言をまちませんが、私としては貴方達がただ Esperanto に興味を持ち、たとえ aktiva でなくともよいから、わが中立の言語を思想的に、又実用的に支持する者になってほしいのです。ところが、ただこれだけのことが実際には中々実行し難いものとみえて、熱心に根気よく続ける人は極く少ないような状態です。その原因らしきものを僕の考えついただけでも述べてみませう。

第一に Esperanto の文法があまりにも簡単すぎると言うことなのです。勿論私のやうな無精者には文法はなるべく簡単なものの方が面倒がなく都合がよいくらいなのですが、向学心にもえる学生諸君にとって多少張合がないらしく、文法 16 箇條を終るとあとは唯単語だけと考へて、天晴れ奥義を究めたつもりでそれっきりにしてしまうといったやうな傾向を散見するのですが、私の考へでは難しいばかりが良い言語でないので易しくすんですぐ實際に使える言語こそ最もすぐれたものと思います。まして kurso 16 箇條などはほんの初歩にすぎないので、Esperanto を完全に身につけるには相当の期間を必要とするのですから、決して途中で投出さず根気よくやっけて頂きたいと思つて居ります。

第二に Esperanto の 思想です。Esperanto を Esperanto だらしめて他の自然の言語と區別して居ますのは実にこれあるがためです。この、平和、平等、博愛の思想こそはエスペラントの中核をなすものなのです。これを除けば、エスペラントなんて単なる欧州語の合成に過ぎないのですから。ところが、これが往々にして novaj gekursanoj の心に適はんらしい。こんな緊迫した世界状勢の中で、しかも明日にも我々の郷土が戦場と化し、その卷添えを食つてあの世に行くやうなことに

もなりかねない世の中にそんな夢物語のやうなことを言つて居れるかといふのです。實際、人間である以上はだしかにさういふ気持にもなりません。しかし、**状態**が悪化すればするほどこの戦争を防止しやうと言ふ思想は必要、且重大な存在となつて来るやうに思います。

第三に Esperanto の将来性や、又、現今の日本では他の言語に比してあまり社会的に実用されてないと言ふことです。勿論極く近い将来、これが世界的公用語として採用され、二ヶ国以上の人種の会話では大抵エスペラントが用いられるやうになるとは思いません。国際会話の唯一の公用語が採択されたとしても、ある特定国の言語がこれに指定されるやうな場合も考へられます。しかし最後にはエスペラント若しくはこれに類似した性質の言語が用いられるだらうと思ひます。なぜなら各民族の民族意識などというものは決して特定国の国語に服従し去るものではないと思ふからです。今のところ日本ではエスペラントに年期を入れたところでこれでお飯を喰ふといふわけにはいきません。大抵の言語はその課程を終了すれば免状といふのがあつて、これが社会に於ける生活の上に大いにもの言ふ場合があるのですが、エスペラントにはこれがありません。なんにもならないものなら何を苦勞してすることがあろうか、時間と紙と手間の浪費ではないか、といふのです。しかし兇悪な行爲の外は泥棒しない限り世の中にはして悪いといふことはないはずですし、やれば一通りエスペラントを修めたことになるのですから決してそのやうな浪費等といふことはあり得ませんし、又将来どんなことで役立つかも知れません。とにかくすればそれだけのことはあるのですからね。

第四に Esperanto 主義者は共産主義者なりとする世間の誤解です。私達は何も格別に共産主義者を毛嫌ひするのでもなく、又兇悪なものとも思つて居りませんが、どうもこの混同されるには甚だ迷惑して居ます。反共的な国家にも共産主義者があるやうに、中立言語であるエスペラントの支持者にも共産主義者は居ります。しかし共産主義と Esperantismo とは全く別なものですから何もそのやうな誤解を気にすることはありません。堂々と公言するがよろしい。

以上エスペラントを貴方達に支持して頂きたいと思ひましてエスペラントに関する気の付いた点を述べてみました。貴方達のエスペラントに対する考への参考の一つともなれば幸いです。

(30, Junio)

## エス語の慣用語句

早川 昇

山賀先生から以前拝借した雑誌(誌名失念)に、「ミグトジブロッカ・ア・ンナより」として、エス語の慣用語句の対訳を連らねたものがあった。私はそれを読ませて頂いて、その要領を得た取りまとめ方に、惚れ惚れとした。そして、早速其れをノートに写し取ると、四五日続けて、毎晩お念佛のように誦唱したものである。

其の一部は、既に、本年のゲ・クルサーノイに写し取って置いて頂いたが、少し私の書き並べ方に拙い所のあった事が悔やまれるので、今茲に、全体を載せる事にする。以って学習の間、座右の兄姉とせられたいと希う。

### A 群 (相関的な意味の表現)

$\left. \begin{array}{l} \hat{c}u \sim a\hat{u} \\ \hat{c}u \sim \hat{c}u \end{array} \right\} = \sim \text{であろうと} \sim \text{であろうと。}$

$\hat{C}u \text{ vi bonvolus } \sim \text{ i al mi?}$   
 = 私に  $\sim$  して下さいますか?

$jen \sim, jen \sim =$  或いは  $\sim$  し、或いは  $\sim$  する。

$ju pli \sim, des pli \sim =$   $\sim$  すればする程益々。

$ju pli \sim, des malpli \sim =$   $\sim$  すればする程益々  $\sim$  せぬ。

$kiel ajn \sim =$ 
 { 大変  $\sim$  ではあるが (kvikam tre)  
 { たとえ 大変  $\sim$  でも (eĉ se tre)

unuflanke ~, aliflanke ~ = 一方では ~、他方では ~。

tia ~, ke (kia) ~ = { 非常に ~ なので。  
~ するような、そんな

tial ke ~ = { ~ する故に。  
~ の理由で (= ĉar)

tiam ~, kiam ~ = ~ の時、其の時に。

tie ~, kie ~ = ~ の処に、其処に。

tiel ~, ke (kiel) ~ = { 非常に ~ なので。  
~ な程、其れ程。  
~ と同様に。

tiom ~, ke (kiam) ~ = { ~ する位も。  
~ する丈、其れ丈。  
~ 程。

tuj (post) kiam (tiam) ~ = ~ するや否や。

ne nur (sole) ~, sed (ankoraŭ) ~ のみならず、又 ~ も。

unu(j) ~ aliaj ~ = 一つは ~、他は ~。

## B 群 (副詞的意味の表現)

al via dispono = お勝手に。

ankoraŭ ne = 未だ ~ せぬ。

antaŭ, ĉio = { 何よりも先に。  
先づ以て。

antaŭ nelonge = { 少し前に。  
先日。  
近頃。

apenaŭ ne ~ = 辛うじて ~ せぬ。

ĉiam pli kaj pli = 一層

de kiam ~ = の時以来。



de kie = 何処から。      de tempo al tempo = 時々  
de komence = 始めから。      de tiam = 其の時から。  
de nun = 今後。      des pli = 一層

en la lasta tempo = 最近。

en la okazo } = 其の場合に。  
en tiu okazo }

escepte se ~ = ~ でなければ。

ĝis kiam = 何時まで。      inter aliaj = 就中。

ĝis nun = 今まで。      iom post iom = 少し宛。

jam delonge } = 既に久しく。  
jam de longe }

jam ne ~ = もはや~せぬ。

jam neniam ~ = もはや決して~せぬ。

jam sen tio = 其れが無くとも既に。

je la unua fojo = 初めて。

jen kial } = 其れだから。  
jen pro kio }

jes aŭ ne = イエスカ、ノーカ。

ju pli ~ = ~ すればする程。

kapon antaŭen = 向う見ずに。

kapon malsupren = 真逆様に。

kiam ajn = 何時でも。

kiel ankaŭ = 並びに。

kiel eble plej (pli) ~ e = 出来るだけ~に。

kiel ekzemple = たとえば。

kiel jene = 次の如く。

kiel kutime = 常の如く  
kien = 何処え。  
kien) ajn = 何処(え)でも。  
la fundo supren = 逆様に。  
laŭ la lasta modo = 最新流行で。  
laŭ mia opinio = 私の考えでは。  
laŭ ŝajno = 外見上。  
laŭ via fontro } 御随意に。  
laŭ via plaĉo }  
malgraŭ ĉio = 結局。  
mano en mano = 手に手を取って。  
meti sur ~ = ~の上え載せる。  
meti en ~ = ~の中え入れる。  
ne tre ~ = 大して ~でもない。  
ne tute ~ = 全く ~ではない。  
neniam plu ~ = 最早決して ~せぬ。  
okulo al oklo = 向い合つて。  
paŝo post paŝo = 一歩一歩と。  
per unu foje = 一度に。  
plej malfrue = 遅くとも。  
pli (aŭ) malpli = 多かれ少なかれ。  
pli (aŭ) malpli frue = 遅かれ早かれ。  
pli kaj pli = 益々。  
plu ne = 其の上 ~せぬ。  
por la lasta fojo = laste = { 最後に。  
                                  { 最近に。

(por) { ĉiam = 永久に。  
          { eterne

same kiel ~ = ~ と同様に。

se ne = そうでなければ

se tamen ~ = たとえ ~ なりとも。

sub la planko = こゝそりと。

sub via dispono = 御勝手に。

ŝtupo post ŝtupo = { 少しずつ。  
                                  { 段々に。

tial { ĉar = ĉar = { 何んとなれば。  
      { ke            { ~ なる故。

tiamaniere, ke ~ = そんな風に。

tiamaniere ke ~ = ~ の様に。

tie kaj (aŭ) { ĉi tie = あちこちに。  
              { aliloke

tiel nomata = 所謂。

tien = 其処え。

tien kaj reen = あちこちえ。

tio estas (= t. e.) = 即ち。

tĉu aŭ alia = { それかあれかと。  
                  { 何かと。

tute ne ~ = 全然 ~ ぬ

unu { al (la) alia = お互いに  
      { (la) alian

unu sur alia = 一つを他の上に、段々に。

unu(j) post alia(j) = 相次いで (続々と)。

unufojn por ĉiam = 永久に。

vizaĝo kontraŭ vizaĝo = 向い合つて。

volu nevole = 否応なしに。

㊦ 群羊 (前置詞的な意味の表現)

antaŭ ol ~ = { ~より先に。  
~せぬ内に。

apude de ~ = ~の傍に。

ĉirkaŭ de ~ = ~の附近に。

dank' al ~ = ~のおかげで。

daŭre de ~ = ~の間。

de ~ ek = ~から始めて。

de kiam = ~以来。

de post ~ = ~の後から。

eĉ se ~ = たとえ~でも。

ek de ~ = ~から始めて。

eke de ~ = ~から。

en komparo kun ~ = ~に比べて。

en la daŭro de ~ = ~の間。

en la interno de ~ = { ~の内部に(所)。  
~以内に(時)。

en la mezo de ~ = { ~の最中に(時)。  
~の真中に(所)。

en la nomo de ~ = { ~の名に於て。  
~を代表して。

en la okazo de ~ = ~の折りに。

escepte ~n de ~ = ~を除いて。

flanke de ~ = { ~の側に。  
~にとって。

for de ~ = ~ から離れて遠く。

ĝis kiam ~ = ~ の時まで。

inter de ~ = { ~ の内部に(所)。  
~ 以内に(時)。

iom da ~ = { 少しの ~。  
いくらかの ~。

kaŭze de ~ = ~ のために(原因)。

kelke da ~  
kelko da kelkoj ~ } = 数個の ~。

komence de ~ = ~ の初めに。

kiel se ~ = kvazaŭ ~ = 恰かも ~ であるかの如く。

kompare kun ~ = ~ に比べて。

koncerne { al ~  
n ~ } = ~ に関して。

kondiĉe de ~  
kondiĉe, ke ~ } = ~ の条件で。

konforme al ~ = ~ に応じて。

konsekvence de ~ = ~ の結果として。

konsente kun ~ = ~ に同意して。

konsidante, ke ~ = ~ を考慮して。

kontraŭe de ~ = { ~ の向う側に。  
~ と相対して。

kontraŭproporce al ~ = ~ に逆比例して。

kun escepto de ~ = ~ を除いて。

kun la kondiĉo, ke ~ = ~ の条件で。

kun la preteksto, ke ~ = ~ を口実として。

kune kun ~ = ~ と共に。

laŭ tio se ~ = ~ かに従って。

laŭ longe de ~ = ~ に (縦に) 沿って。

malgraŭ (tio) ke ~ = ~ にも拘らず。

malproksime de ~ = ~ の遠くに。

memore de ~ = ~ の記念のために。

meze de ~ =  $\left\{ \begin{array}{l} \sim \text{の最中に (時)} \\ \sim \text{の真中に (所)} \end{array} \right.$

multe da ~ = 多くの ~。

ne malpli ~ = ~ に劣らず。

okaze de ~ = ~ の折りに。

per helpo de ~ = ~ の助けにより。

pere de ~ = ~ によって (手段、媒介によって)。

plenbuŝo da ~ = 口一杯の ~。

pli (i-multe) da ~ = もっと多くの ~

por ke ~ = ~ する為めに。

post kiam ~ = ~ した後に。

pretekst(a)nt(e), ke ~ = ~ を口実として。

pro la bono de ~ = ~ の (幸福) のために。

pro manko de ~ = ~ の欠えの為めに。

pro memoro de ~ = ~ の記念のために。

pro tio ke ~ = ~ したせいで。

proksime  $\left\{ \begin{array}{l} \text{de} \\ \text{al} \end{array} \right. = \sim \text{の近くで。}$

proporce al ~ = ~ に比例して。

rilate al ~ = に関して。

same kiel ~ = ~ と同様に。

se tamen ~ = だと言え ~ だりとも。

simile al ~ = ~ に似て。

sub de ~ = ~ の下に。

supozinte ke ~ = ~ と仮定して。

tiamaniere ke ~ = ~ という風に。

tuj (post) kiam ~ = ~ するや否や

以上 (3, Julio)

Salutletero al Prof. D-ro Ed. Privat, Svisujo

---

Otaru, la 15-an de Junio, 1952

Estimata Profesoro,

Mi havas la honoron saluti vin en la nomo de Otaru Esperanto-Asocieto, filio de Japana Esp.- Instituto. Niaj asocianoj ĉiuj unue legis vian malnovan verkon " Karlo " kun intereso kaj emocio. Post la elementa kurso oni komencis lernadon de nia lingvo per via amata verkaĵo kaj entiu momento ni ĉiuj konas vin kaj respektas vin kaj eĉ sopiras vian nomon.

Hazarde oni trovis vian artikolon " Antikva Pacifisto, la Hinda imperiestro Aŝoka ", aperinta en tiu ĉi januara numero de " Esperanto ", organo de U.E.A.

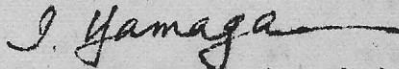
Cetere ni konservas unu libreton kun bildoj, titolata: " La Admono kaj Vivo de Reĝo Aŝoko ", tradukita de s-ro R. Okazaki ( eldonita en 1937, Kioto, Japanujo ). La tradukinto s-ro Okazaki estis juna budaisma bonzo kaj samtempe fervora esp. samideano en nia urbo Otaru. Tamen mi bedaŭras, ke li jam mortis pro malsano antaŭ jaroj. Nur lian postlasitan verkaĵon oni konservas ĉe ni.

Viante vian artikolon pri Reĝo Aŝoko, ni tre interesigis kaj ĝojis kaj deziras donaci tiun ĉi memora libreton al nia estimata profesoro, aŭtoro de nia amata " Karlo ".

Bonvole akceptu nian malgrandan peton kaj saluton. Ni estas ĝoja kaj honorinda, se ni nur povos ricevi vian propran skribaĵon,

Sincere via ,

D-ro Isamu Yamaga



Estro de Otaru Esperanto-Asocieto  
Delegito de U.E.A.